

027
483
1

あまの
いせ



027
485
1

専女知家
第 / / / / 號
書 圖

三山書房

11911
118

118

露松 畫冊三周懷舊叙

露松 畫冊三周懷舊叙

三山書房

いづれにのり鳥辭といふ所あり師を
道にたつてふ所ふとくもそれ樂を爲とい
ゆる一不ぬをいふ人 延喜のたつた無廟
初号
初号 其道をいふとくはるく 安ん
むててそをを飛く今のは皮女
とらとけとて清人程安ふ事んてを
ふりてぬ一茶屋の面一とて所り

志意疎やわしきを其師字よりこれる
 ありの事なりと吾をわくを言ふ
 かきし少く長とあそ少や久
 三ノ之韻はしとせき乃水を
 ちよし言ふの法をたあすしな
 一々一々七十八叟五蓬一なるん

享和元年辛酉夏四月の

入葺陸

丙寅乃也一ちれ城ろしほ一余の
 ころのこをこをかくと一とてあし
 相養もの好ともて者運橋をり
 ひんれはほんくさる一房のうりり
 ひとあつ歩耕重老人ら一系は
 舞をおろし向をたふあはしれ
 名形る一ゆ一初録二

位はち家の一系もかれぬと 鳥辭

落あといひと系此以陸の世帯外也花

伊与の湯析

左

吾ひよりまほをる相乃志
松井れあは影ほろあ
あぢと志あまは清くて
緘字らかまをとほるまは若
ゆくや吹き自雨さふ
心は名れある案のし立
喰のあま音も雪れ自乃屋戸
舞はあふよりふ合わらま

滄波

雪屋

茂索

市泉

煮牛

右権

佳夕

薩水

中

柴雪のえぬもれさるる為
まほしほくふあまあくま
地動をへはぬふ志乃まほれ
下都の早れ柄のみう
あまねする風りまふ雪は冬
くへふふまの了雨れまほ
室中目さとも老をまほさく
桶のひまあし葉の心を望
目まれあまま月くのこい標

柴雪

南浦

為負

関獲

雪仙

李石

子得

推已

有隣

江洲とつとてあそびた秋風
 桐子仁業——とてふ第百大工
 かねてははらりてとら第百一
 筆路とてそとをたれとら乃て
 花をさめしう 駒のしゆ水と
 北田とて河とて花とて面とて家
 心よりあしとてあめと物己乃て
 女院もつ浮のもきとて家とて
 鐘研 とてと 整巻一——きとて
 甫由 震水 歌歩 布岳 梅児 為疎 五蓮 乙我 寸心

右

山りお凡そとらとて大香庄
 飛——とてりもの清とてま
 夜道とておれそあゆみ 高部鳴
 寸白とて交乃て情とてもとて刺
 錫杖の程とても汗を柳の——
 やし——とて第とて花とてあゆ
 信房とて和葉——とて心とてとて
 市井 徳波 持己 花雲 帯也 住夕 五蓮

漢坐

吾常法界之

餘無當坐

あはれも(枝)もいつぬてゆらら
ゆあはれをくくもさうりれ牡丹こふ
深止、祖原杉のあふくは鳴きり
世中もあつねぬもあふ雷こ鳥
くはとぬらうぬくより相嵐
去卯木牛れしゆいよふあふせり
あのはるの箱のあはれあつくさあ
人——あはれあつくあつりあ

去蓮
菊由
古籠
持色
狂夕
月露
柳兜
あふ

あつてはれぬよりゆり加也里可登
余はあつたあつはれひるあつりけい
あつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつた

あつた
あつた
あつた
あつた
あつた
あつた
あつた
あつた
あつた
あつた

志をりし人なまのくはるあれ 落葉
るふは無二露もほろもぬまうの光 月影
水うらまをさくハ陰をき一のふ 雲出
川橋の屋を曳申ふやまはれふ 水天

東都の書り分由

巡りもくやあぬぬあふ景 暮憶

川の浮浄本然り 蹟るふ

うけくまうまう雲下ゆるふ

とありし一葉ふらふ

松露菴

三十九日とあり

うらまをさくハ陰をき一のふ

鳥明

柳きわれまをあやまりてあふら川の
あひ物も秋も色あやらうらうら
あや物も秋も色あやらうらうら
あや物も秋も色あやらうらうら
あや物も秋も色あやらうらうら
あや物も秋も色あやらうらうら

神工身修を重んじしを志す一也
其の如く有りては神工の如く
神工の如く有りては神工の如く
神工の如く有りては神工の如く
神工の如く有りては神工の如く

神工の如く

案改

一葉



神工身修工壽仙堂

